

閑話
閑話

モルト家の双子

和

※※※まえがきにこんなことを書くのもどうかと思いますが.....

この【閑話】という冠詞について。

本作品は著者が数年前から構想を練っているファンタジーに出てくる、超サブキャラクターをメインに据えて書いたお話です。だから閑話。つまりは無駄話なわけです。

だけれど、

あなたがいま、こうして本作品に目を通そうとなさっている。

これはきっと、かれらの存在そのものは無駄ではないということですね。

著者はよく、話の創作中に脱線します。

「どうしてコイツはこの場に登場してきたのか」

「どうしてアイツはあんな性格なのか」

考え出したら止まらず、気づけば一つの話が出来上がってしまうくらい、著者の中ではサブキャラ達のスピンオフ作品が多いです。そして、大抵が本編より先にできてしまう。残念と言えば残念なのだろうか。とにかく、そんなわけで本編よりもこのスピンオフ作品を先にお披露目いたします。

本編中盤にできたスピンオフと言うことで、登場人物について軽〜く次頁をご覧ください。

(見なくても問題ないですけどね)

登場人物

- ライラ・ア・モルト ... モルト家長女。職業は医師。
- ライア・ラ・モルト ... モルト家次男。ライラの双子の弟。
- ロイ・ド・モルト ... モルト家三男。現在無職。
- ノーツェ・デ・モルト ... モルト家長男。科学者。
- ダルト・アン・モルト ... 上記四人の父親。

※この世界のモルト家の位置づけ...「貴族」

本編に差し支えのない程度の説明書きですが、こんな方々が登場します。

本作ではタイトル通り、双子であるライラとライアの話です。

本編ではこの二人、まったく活躍しません。著者が言うのも何ですが。本当に、本編に名前すら出さなくても差し支えないくらいに活躍しないのです……。

そんな二人の話ですが、

ここであなたがこの駄文を目にしているのも何かの縁でしょう。

最後まで付き合っただけなら幸いです。

「あー、」

ライラの大きな声が鼓膜を打った。そうやって目覚める朝は少なくない。ライアは半身寝返りを打って、ライラの声がした方を見た。寝起きの目はまだ霞んで、ライラの姿を捕らえていなかったが、「お早う」と声を掛けた。

「ライア、貴方、あのローブどうしたの？」

目を擦って漸く、ライラの姿を見つけた。箆笥の前で両手を腰に当てて仁王立ちしている。ローブ、と頭の中で幾度か反復して、漸く事態が飲み込めた。

「ああ、あの紺のローブ……ええっと、そうだなあ……」

ライアは上体を起こして、天井を見た。思わず欠伸が出たので手で隠したが、その口からはそれ以外の音が出ない。まだ、寝起きだから喋ることすら怠りたい。

「そうだなあ…、て。そうやっていつも適当な言い訳を考えるのに時間を使うんだったら素直におっしゃい！大体察しはついてるんだからね」

そういうとライラは指を折り始めた。

「まず、破ったから捨てた」それにライアは首を振って否定した。

「汚しちゃってたがばれるのが嫌で、何処かに隠した」これにもライアは首を振った。

「じゃ、誰かにあげた」

「ああ…」

欠伸とも返事ともつかない声をライラが出した。

「んもう。やっぱりそうか。どーせ、ロイに泣きつかれたんでしょう？」

「ロイは泣かないよ」

そう言って、ライラはライアに微笑みかけた。

「お早う」

もう一度そう言ったのは、漸く頭が回ってきて、起きたという実感が湧いてきたからだ。どうも、タイムラグがあるようで、一日に二度「お早う」というのはいつものことだった。

「漸く起きたか、この寝坊助」

ライラは部屋のドアまで歩いて行って開け、廊下からワゴンを押してきた。廊下に置いてあった朝食だ。いつもライラが準備して、ライアの部屋に持ってくる。本当だったら、家族揃って朝食を取りたいところだが、この乱世に忙しい祖父と父は滅多に家にいない。異常なまでに研究に没頭する長兄は、中々城の研究塔から出てくることも少なかった。

病弱のライアは、体調によって皆と朝食をとれるかも日によって変わる。王立医療院に勤めるようになってからのライラは、ライア専属の医師のような立場になった。だから、朝一番に彼の様子を見、共に朝食を食べ、問診、触診をして、就寝前にも様子を伺うという日々の繰り返しだ。普通だったら、診ているこちらがノイローゼになりそうな日々である。

しかし、ライラは苦ではなかった。

幼い頃からライアは病弱で、一緒に遊ぶことなど殆どできなかった。

双子のライラとライアは幼少の頃、区別が付きにくいほどにそっくりで、その為、二人で画策して双子特有の悪さをしたこともあった。しかし、そのどれもがライアの体を考えた範囲のことだったから、大人から見れば相手にするような程の悪さではない。年を重ねると、そういう時間はぐんと減った。ライラはお姉さんなんだから、ライアのことを考えなさい。そう言われるようになってきたのだ。ライアはいつも周囲から可愛がられ、ライラは咎められる。

お姉さんなんだから。

双子なのに？

ライアは身体が弱いだよ。

あたしと変わらないよ。

違うわ、ライアはね、病気なの。ライラは元気でしょう？

元気じゃないときもあるよ。

そうね、でも今は元気よね。

不公平だ。ライラは常にそう思っていた。

姉だから。元気だから。

そう言う大人の言葉が、ライラの中で別のものに変換された。

弟じゃないから。病気じゃないから。

だから、ライラは提案した。七歳の誕生日のときに。

「ねえライア、今度の誕生日に入れ替わらない？」

五歳の時など、二人は良く入れ替わりの悪戯をした。だから初めてのことでない。しかし、ここ暫くはライアの体調を思って、滅多にそういう遊びはしていなかった。

「いいよ、やろう」

ライアはごく自然に、嬉しそうに応えた。

ブロンドの髪に、少しの赤毛が混じっている。髪型は二人とも同じ、ショートカットで色白、瞳の色はグレイだ。その何もかもが同じ。違うのは性別と性格と体調。でもそれは、いつも一緒にいる二人にとって、性格や習慣を交換することは難しくなかった。ライラはその日、ライアになりきっていた。

「お誕生日おめでとう！」

親や兄、親戚から二人は祝われて、たくさんのプレゼントを貰った。そのプレゼントをはしゃいで片っ端から開けているのは、ライラになりきった病弱ライアだった。

「ライラ、僕に分まで開けないでよー」

口先を尖らせてライラが言った。それを聞いて周りの人たちは笑っている。どうやら誰一人、入れ替わりに気付いていない。

「あ、凄いこれ！」

ライアが手に取ったのは、六つ上の兄ノーツェがくれた水飲み鳥のおもちゃだ。鳥のおなかの部分に何か液体が入っているだけなのだが、コップに入った水を嘴を付けて飲む動作をひとりでに繰り返す。ノーツェの自作だった。

「兄様、これどういう仕組み？」

「ライラもこういうのに興味持った？」

ノーツェは嬉しそうにライアに話しかけた。それを少し離れたテーブルでライラは見ていた。目の前に美味しそうにデザートが並んでいても、一口ずつしか食わず、あまり大きな声は出さず、席を立ったりしない。遠くから来た親戚の話に耳を傾け、適当に笑顔を返す。

「ライア君も、大きくなったわね。やっぱり男の子だわ」

誰だかわからない親戚の小母さんにそう言われた。お世辞だとすぐにわかった。ライラとライアは背格好が全く同じだから、男の子だから大きい、なんてことはない。

「そんなことないですわ。ライラの方が腕白で」

母がお世辞に応えて、二人は高い笑い声を上げた。母たち女性陣が、談笑していると、父が横で耳打ちをした。

「ライア、疲れたら言うんだぞ」

ライラはそれに笑顔でこくりと頷いた。父が心配してくれたことが嬉しかった。母は世間体を気にして、いつもライアにするように優しくなかった。それをフォローするかのよう父が気遣ってくれる。だけど、ライラは思った。

（入れ替わりって、こんなつままないものだったっけ…？）

ライアになりきろうとすれば、あまりはしゃぐこともできない。ご飯も沢山食べれない。愛想笑いばかり浮かべている。昔は、こんな風じゃなかった。

つままない。

ライラは心底そう思った。そう思うと、今度は元気にはしゃぐライアが羨ましくなっていた。普段は遊ぶことすらままならないライアは、今、人目を憚ることなく遊んでいる。ライラの提案を受けたのは、初めからこれが狙いだったのではないか。ライラを椅子に縛り付け、自分は遊ぶ。そうするために、入れ替わりをしたのではないか。そう思えてならなくなった。

見ると、ライアは三つ下の弟ロイと一緒にノーツェの話真剣に聞いている。ノーツェは頭が良い。難しいことをよく知っている。今回の水飲み鳥も、そういう難しい理論の応用なのだろう。ライラだったら、そんなつまらぬような話を真剣に聞かないし、そもそも水飲み鳥に興味を示さなかつただろう。なのにライアは、ライラになりきっていることを忘れ、話に聞き入っている。普通だったら、その様子で違和感を覚えるかも知れない。だけど、親たちは親戚との話に興じているし、ノーツェは一回火がつくと周囲への注意力が落ちるので気付かない。まだ幼いロイなど、気にも留めていないだろう。漸く、ノーツェの話が終わったようだ。

「よくわかんないけど、凄ーい」

ライアが言った、何気ないその言葉がまた、ライラの心に突き刺さった。

入れ替わりを忘れて聞き入ったくせに、そこはあたしを演じるわけ？

『よくわかんない』？あたしを馬鹿にしてるの？

確かにライア、貴方は頭良いわよ。でもそれって無いんじゃない？
あたしは貴方と違って、勉強する時間は少ないもの。
一日中ベッドの貴方とはね。

ライラは双子の弟が憎くて仕方が無くなってきた。

夕刻になって、親戚は泊まる者と帰る者に分かれた。誕生パーティーは実質お開きになったが、大人たちは別の部屋でお喋りを続けている。父のダルトは病弱なライアになりきっているライラに一言言って、部屋を出た。

「遊びもほどほどにな」

優しさから来る言葉は、もうただの枷でしかなかった。

ライラ、ライア、ロイの三人は、プレゼントの物色がまだ途中だと言うことで、使用人にプレゼントを運んで貰って、ライラの部屋に行った。ロイはライアについている。ノーツェは自分の部屋へ戻っていったから、遊び相手が双子の姉兄以外にいなくなったのだ。

部屋に三人きりになって、ライアはにこっと無邪気に笑った。

「だあれも気付かなかったね」

ライラはロイを一瞥した。ロイはキョトンとしている。

「そうだね。……楽しかった？」

「うん、最高」

そう言ったライアの額にうっすらと冷や汗が出ているのを、ライラは見逃さなかった。

「そうだね、」ライラはロイが目の前にいるのを気にしながら言った。「もうちょっと、このプレゼント、見てみよ」

三人はしばらく、プレゼントを適当に並べて、片っ端から遊んでいった。そうしている間にも、ライアの額の汗の量は増えていく。

さあ、遊びたかったんでしょ。ずっと。

あたしが遊んだげる。楽しいでしょ？

ライラは心の中で薄ら笑いを浮かべながら、休む間も無しに、さっき遊べなかった分を消化するように遊んだ。三人で部屋を駆け回ったりもした。ライアの息が切れて苦しそうなのはずっとわかっていた。

暫くすると、飽き性のライラは自分のプレゼントをひつつかんで、隣にあるライアの部屋に入った。一つ一つプレゼントを、一人でじっくり吟味するためだ。ロイはライアと残っていた。二人の部屋は壁一枚で仕切られた隣同士で、廊下にドアが二つ並んでいるが、部屋同士を繋ぐドアが中にもあった。だから、仕切りとなっている壁のドアからライラは出て行った。プレゼントも見飽きて、ベッドにゴロンと横になったライラは意外と疲れていたのだろう。うとうとしてきていた。見つめる天井に、何かが光った。なんだろう、あれは。考える間もなく、ライラは眠りついていた。

目が覚めたのは、随分後になってから、と思ったのはライラだけで、聞いた話によると、そんなに時間が経ってない頃だった。父ダルトに起こされたのだ。どうしたのかと思ったら、そのベッドから退けと言う。その理不尽の物言いに、ライラは反論しようとして、父が抱えるライアを見て絶句した。血の気が失せた真っ白な顔。半分閉じた、生気のない瞳。だらんと垂れた細い手足。死んでいるようにしか見えなかった。人形だと思えるほどに、人間には見えなかったのだ。

「なんでお前がここにいるんだ！退きなさい！」

再度、叱咤されて、漸くライラの身体は動いた。ライラが先程まで寝ていたベッドに、ライアが寝かされた。ライアはダルトにされるがままで、反応は一切無い。

ライラは父が何か言っていたのも聞かず、壁のドアを開けて自分の部屋に戻った。散らかったままの自分の部屋。先程まで、ライアが遊んでいたのは明白だった。その一角、色とりどりのブロックが無造作に散らばっている場所があった。そこにロイが蹲っていた。

「ロイ、」

ライラが呼びかけると、涙で濡れたロイの顔が振り返った。

ごめんなさい、と呟くと、散らばったブロックを手に取り始めた。片づけようとして、作業が中々はかどらない。ロイは下唇を噛んだまま、黙々とブロックを拾う。拾っては落とし、また拾う。箱に詰めるのも、様々な形のブロックは上手くはまらない。そのうち、うまくできないと言って大声で泣き出すのではないかと思った。しかし、ロイは一言も声を出さずに片付けをしている。隣の部屋にいるライアを思って、声を出さないのだ。それが痛々しいほどに、ライラにはわかった。壁一枚で仕切られている向こうの部屋に、ぐったりとしたライアがいる。ライアの体調を悪化させないためにも、ロイは良い子でいなければならない。ライアが体調を崩す度に親から言われている言葉だ。ロイはそれを遵守している。自分が良い子でいると、ライアはいずれ回復すると信じているのだ。

ライラは自分の部屋で、呆然と立ちつくすことしかできなかった。隣で、人の声がする。掛かり付けの医者が来たのか、それとも父が使用人に何かを命じているのか。少しずつ、騒々しくなっていく。ライラは、ここにいたくないと思った。廊下に通じるドアを開けようと、歩くと、後ろからロイが必死にライラの服を掴んだ。

「おねえちゃん、おにいちゃんは良くなるよね？ぼくは良い子にしてるよ。だから、良くなるよね？」

ライラは、そうだね、と言うことしかできなかった。ロイはまだ服を放さない。下唇を噛んだまま。目に涙を溜めたまま。

「ぼくが、…悪いの？」

掠れた声でロイが言った。唇を噛んだままだったから、はっきりとは聞こえなかったが、そう言ったようにライラには思えた。

驚いた。

まだ幼い弟がこんなふうにいるなんて。ライラはロイの頭に手をのせた。

「ロイの所為じゃない。病気は、誰の所為でもない。でしょう？」

最後は、まるで自分に言い聞かせているようだった。

誰の所為？

そう聞いてライアがさす指の先にいるのは自分だと、そういう想像が頭をよぎった。

ライラが入れ替わりを提案したんだ。

ライラが遊ぼうって言ったんだ

ライラが…。

ロイは重ねて言った。

「ぼくは、…良い子じゃないのかなあ…？」

ライラはいつも悪さばかり。

ライラは他の女の子と違ってお転婆。

ライラはすぐに怪我をして帰ってくるし、服も汚すの。

いつか、母が言っていた言葉だ。ライラはその言葉を振り払うように、左右に大きく首を振った

。

「違うよ。違う……」

ロイに言ったわけではない。ライラは自分に言っていた。

「ずるい……。ライアはずるいよ」

そう言って、ライラは自分の部屋から出て行った。なるべく遠くへ行こうと思った。しかし、屋敷から出るのは躊躇われ、庭に出た。ライラたちの部屋とはちょうど対角の位置にある庭だ。屋敷の外壁を背に、足を抱えて座った。その両膝に、顔を埋める。何も聞きたくなかった。それでも頭から離れない、非難の声。

(最初から、わかっていたことじゃないか)

頭の中で、ライラの冷静な部分と言う。

(でも、あたしは単に、入れ替わりを楽しみたかっただけ……)

別の部分のライラが答える。

(だけど、ちょっと考えればライアがああなるってわかるだろ?)

(昔はならなかったよ)

(昔は加減してたからね。今日は、加減しなかったじゃん)

頭の中の冷静なライラは、冷たく言い放った。

その声は、何故かライアの声に聞こえた。

一週間が過ぎた。

その間、ライラを責める声はない。だから逆に勘繰る。親は、兄は、こう思っているのではないか。親戚は、ああ思っているのではないか。そういう実のない妄想が、ライラの心に重く積み重なった。

ライアが危篤で、王立医療院に入院した。隣の部屋は、今、空っぽだ。しん、と静まりかえった部屋が、なんだか恐ろしい。たまに、ベッドからライラを呼ぶライアの声が、この一週間途絶えているのだ。

ライアに帰ってきて欲しい、と思う反面、帰ってくるのを恐れている部分もある。ライアは絶対、ライラを指さしてこう言う。

『ライラが入れ替わりを提案したんだ』

言われたくない。

ライラは二つの恐怖の間で、押しつぶされそうになっていた。

そんなとき、ライアの回復を聞いた。親や兄弟は心の底から喜んでいる。もうすぐ仮退院できそうだ、と父は言った。ライラは上辺だけの笑顔を見せた。

その翌日、父が言っていたように、ライアは仮退院をした。一時的に屋敷に戻って、経過を見る。必要ならまたすぐに入院をするし、通院か、医師の往診は必要不可欠だった。車椅子に乗って帰ってきた双子の弟は、げっそりと痩せ、そっくりだと言われた二人の相貌に差が生じた。

「ただいま」

ライアがにっこり笑って言ったものの、その顔にはまだ若干の疲労が見える。

そして、一回り小さくなったその指で――

きっとライラを指さして――

ライラはそう思って、俯いた。

言うなら早く言ってくれ。

だけれど、ライラが想像したそんな場面になることは一度もなかった。

その日から、何事もなかったかのように以前と同じ日の繰り返しが始まった。ライアはたまに、ベッドに入ったままライラを呼んで、無邪気に笑う。ライラはそれが不思議でならなかった。だから、思わず聞いたのだ。それは自分でも驚くくらいに衝動的だった。

「なんで、笑ってられるの？」

ライアはキョトンとした。そう言うときの顔は、あたしよりもロイにそっくりだとライラは思った。

「だって、楽しいでしょう？ライラは僕と居て、楽しくないの？」

「楽しくないよ」言ってから自分で驚いた。「あたしの所為で、死にかけたのに、楽しいの？どうしてあたしの所為だって言わないの？」

「違うよ」

ライアは即答した。その顔は怒っているように見えた。ライアが怒るところなど、見たこと無いからはっきりとそう言えないが。ライラには怒った顔に見えた。ライラは、自分が惨めになった

気がした。だから、部屋から走り出して出て行った。

庭に行こう。

そう思っただけなのに走っていると、ロイが立っているのに気付かずに思い切りぶつかってしまった。ライラも尻餅をついたが、身体の小さいロイの方が派手に転んだ。ライラは舌打ちしたい気持ちを抑えて、ロイの腕を引っ張った。

「大丈夫？」

ロイは今にも泣き出しそうな顔をしていた。ライラは引っ張る腕の力を緩めた。

「怪我は？どこか痛いところ、ある？」

ロイは頭を振って、泣きそうな顔のままニコッと笑った。

「へーき」

「もう、そう言って無理してるんじゃないの？駄目だよ、怪我してたら言いなさい」

そうやって、立たせたロイの服を軽くはたいてやった。ついでに膝など擦り剥きそうなところも見た。ロイは口を尖らせて、へーきだよ、と言った。

「おねえちゃんって、そういうところがおにいちゃんに似てるよね」

「似てる？」

ライラは聞き返した。ロイの言う「おにいちゃん」はライアのことを指す。ノーツェのことはいつも「にいさま」と呼んでいた。

ロイはこくりと頷いた。

「おにいちゃんがないとき、おねえちゃんはおにいちゃんにそっくりだよ」

そう言うと、ロイは行かなくちゃ、と言ってライラに手を振って歩いていった。その足が、多少引きずるようになっていた。

「ちょっと、」ライラはロイの手を取った。「何処に行くの？」

「おにいちゃんのところ」

ライラは迷ったが、そのままロイの手を引いてライアの部屋に向かった。さっきの、喧嘩とも言えないような気まずい空気を感じながら向かったライアの部屋は、先程と寸分変わらずにライラを迎え入れた。部屋に入ってきたライラを見た弟が、ベッドの上でにこりと笑った。

「やあ」

ライラは応えずにいた。応える資格など、無い。

ロイはライアの傍に寄っていくと、嬉しそうに喋り始めた。

「おにいちゃん、元気になった？」

「なったなった。ロイが良い子にしたからだよ」

「ほんとう？」

「ああ、本当だよ」そう言って、ライアはロイの髪の毛をくしゃりと撫でた。「それにね、」ライアは顔を上げた。「僕を心配してくれる人が、いつも傍にいるから」

ライラを見てそう言った。

ライラはどきり、とした。

心配？あたしが？

ライラは思い返した。伏せっていることが当たり前の弟。よく風邪を拗らし、入院する。それが日常で、一々心配などしてられないほどである。心配などしただろうか。

考えて、考えた。

だけれど、よくわからない。

それが、いつものことだから。

風邪を引いて当たり前、入院して当然。

だけれど、かつて一度も、弟が死ぬと言うことを考えたことはなかった。それは、体調を崩しても回復すると思っ込んでいるからだ。それが、先日の誕生日のときだけは違った。あのときは、もしかしたら死ぬのではないか。本当にそう思った。思ってどうしただろう？ そうだ、帰ってきて欲しいと願っただの。

それが心配してったことになるかどうかはわからない。でも、ライラは弟の回復をもう当たり前と感っられなくなってった。そして、弟が死んだらそれは自分の所為だと思っ。たとえ、弟の命を奪うものが病であったとしても、偶発的な事故であったとしても。いつも一番近くにっる自分が守れなかつたことに変わりはないのだから。

『おにいちゃんがないとき、おねえちゃんはおにいちゃんにそっくりだよ』

ロイが先程言った言葉。ロイを心配するライラを見てそう言っただの。ライラは、弟の前で心配してっる素振りを見せただことはなかつた。心配すれば、ライラはそのことを気に病むと、どこかで感ってった。だから、ライラの前では元気でっること、はしゃぐことばかりをしてった。それをライラはいつも笑顔で見てっる。嬉しように。親や親戚は、そんな二人を見て対照的だと言った。

『違うよねー』

いつだっただろう。ライラが言った言葉を思っ出した。

『僕ら、実際は真逆じゃないよね。同じものを持ってるけど、普段はそれを役割分担してっるって感っる。元気担当はライラだよ。だから、ライラは風邪なんか引かないでよ』

『それって病気担当がライラみたいでヤダ』

『でも、怪我担当はライラだからおあいこだよ』

『えー、それもヤアダ』

性格も、本当は似てっる。だからお互いのことが良くわかると、そのときライラは言っただの。

ライラも、それに頷いた。

そう、お互いのことを良く理解してっる。

ライラは、ずっとライラの心配をしてったし、ライラはライラの心配をしてった。

ライラは肩で息をした。

「あのねえ、あたしはいつも傍にっるわけじゃないよ」

少し、強い調子で言ってしまっただかもしれない。ライラは悲しそうな、困っただよな、なんとも言えない表情でライラを見つめ返した。

「——でも、」

ライラが言いかけるのを制してライラは続けた。

「そんなにいつも一緒にいて欲しいなら、いてあげる。それで文句ない？」

一瞬、目を見開いて固まったライアは、次の瞬間にぷっと吹き出していた。

「ああ、いいよ。それでお願い」

そのときから、ライラは弟の病を治すために勉学に励み始めた。王立医療院に入るためだ。知識を得ると、視野が広がる。視野が広がると、現実がリアルな形で突きつけられる。決して生易しい道ではなかった。学べば学ぶほど、知れば知るほど、ライアの病を治すのが如何に困難であるかを知る。それでも、ライラは諦めなかった。一度、死の淵に弟を追い遣った自分が、守ると決めたのだ。途中で投げ出すのは、何より自分に許せなかった。

命を賭して、弟を守ろう。

だから、今でもライラは地道な看護を続けている。

「ねえ、」ライアが窓辺を見ながら話しかけた。「覚えてる？七歳の誕生日のこと」

「忘れるわけ、無いでしょ」

朝食を食べている最中。ライアは食の進みが遅いくせに良く喋る。二人でご飯を食べているときに喋るのが好きなのだ。

「あの時さ、僕はライラになりきってたでしょ」ライラは頷いた。「誰も気付かなかったし、成功したと思ったよね？でも、ロイは気付いてたんだよ、最初から」

え、とライラは口の中で呟いた。そう言えば、ロイは今まで一度も二人を間違えたことがなかった。

「どうしてわかったの？今ならまだしも、あの時ってそんなに違いなかったじゃん」

ライアは可笑しそうに笑ってから、「それがさ、あいつ、目が凄く良いんだよ。視力が、てことじゃなくて。なんていうんだらう。見たものを脳に焼き付けて、映像を処理する能力って言ったらいいのかな。どうやら、僕らの微妙な髪色の違いがわかっていたらしい」

ライラは眉根を寄せた。確かに、二人の髪色は僅かに違う。それはずっと一緒にいる二人に漸くわかる程度の違いだ。ブロンドヘアに、少し混じった赤毛。それでもって橙色に見える髪は、ライアの方が僅かに赤が多い。だけど、それに親も兄も気付いていない。

「確か、私たちも髪色の違いに気付いたのは、十歳くらいじゃなかったっけ？」

「そうそう、ライラが髪をばし始めた頃だよ。それまで気付かなかった。ロイは凄いよ。あいつが千読みっての、すごく頷ける」

「ああ、癖字とか見て、解読するんだっけ？」

「そうそう。……それで話戻るけどさ、誕生日の日、僕がプレゼント見て遊んでるときにロイが言ったんだよ。『おにいちゃん、大丈夫？』って。僕は正直、ライラの性格を真似きれてなくてばれたのかと思ったよ」

「うん、確かに下手な演技だった」

「え、そうだった？」

ライラはうんうんと頷いた。

「う～ん、上手くやれてたと思ったんだけどなあ」

「でも、そのときロイにばれたのは演技の下手さじゃなくて、髪色だったわけでしょう？それ、いつ聞いたの？」

えっと、とライアは空を見ながら応えた。

「二年くらい、前かな。ふらっとロイが帰ってきたときだよ。ちょっと興味が湧いて、聞いてみたんだ。そしたら、髪が違うって言われてね。じゃあ、演技でばれた訳じゃなかったんだって言ったらね、ロイはキョトンとしてこう言ったんだよ。

『兄貴と姉貴は性格が似てるから、目隠ししたらわかんないよ』」

「へえ、まさかそんな意見が身内から聞けるとは」

ライアは笑った。

「本当に。今度、ロイが帰ってきたら、試してみようか？久々に、入れ替わりができるよ」

「ってことは、最近帰ってきたんだね？あの放蕩者は」

ライアは誤魔化すように、あははと笑った。

平和な会話。昔の話をして、笑って過ごせるくらいに。ライラはこんな日々に幸せを感じていた。好きな人と、楽しく同じ時間を過ごせること。これ以上の贅沢はない。貴族に生まれながら、ライラにとっての贅沢な時間はまさに今、この瞬間だった。

命を賭して、弟を守ると誓った。

それはつまり、いつも一緒にいるというあの日の約束。

ライラはその約束が今、自分を支えていると実感している。

では、ライアを支えているのは何だろう？

ライアは命を賭して、何を成そうとしているのだろうか？

沸々と湧いた興味に、ライラは朝食を食べる手を止め、聞いた。

「ライアは、命懸けで何かやるってこと、ある？」

いきなりの質問に、ちょっと首を傾げた。ん～、と唸って、ライアは応えた。

「そうだな、命懸けで生きてる、かな」

命懸けで生きてる。

今も尚、病に冒されている弟だから言う言葉。でも——

「へえ、いいこと聞いた♪」

命懸けで弟を守ろうとするライラ、それに命懸けで応えようとするライア。

二人はどこまで言っても似たもの同士なのだ。

あとがき

お粗末様でした。

途中、「ん？」と思うような会話や単語があったかもしれませんが、これは（何度も言うようですが）本編中盤に挿入されるべき閑話ですので悪しからず。

寧ろ閑話でありあまり登場しなかったロイ、ノーツェ、そして彼ら兄弟の祖父は本編で普通に登場します。

（父ダルトは本編でもサブキャラ……ちょっと可哀想に感じてきた）

話の順序として、この閑話を先に出すことは望ましくなかったかもしれませんが、なにしろ本編は現在、この閑話の十倍ほどの文章にさしかかっているものの、物語の3/4と言ったところ。しかもここ数年、その状態で筆を置いたまま書き進んでません。

だから、これを世に出したのは著者自身の戒めのつもりです。

はやく本編書けよ、という。

そうでもしないと、いつまで経っても完成しない気が……。

ゴホッゴホツ。

失敬。

もし、ライラとライアの話を入りにいただけたら、また何処かで、彼らの住む世界の話を読んでもらいたい。

——その為にも、まず著書が書かなきゃいけないんですがね。